

世界的に活躍する二人の詩人による、美しい出会い

許炯萬（ホ・ヒョンマン）博士

世界的に活躍する日本の詩人、マキ・スターフィールドと、韓国を代表する詩人、ヤン・グムヒによる詩集の共同出版は、まさに韓国と日本、両国の文学界における画期的な出来事であると言ってよい。

マキ・スターフィールドは、韓国でも広く知られる高い評価を得た詩人であり、日本国際詩人協会の会員として、また文学同人誌「蒼穹」の同人として精力的に活動している。さらに、優れた翻訳家であり、文学活動家、画家としても、幅広い創作・文化活動に積極的に取り組み続けている。

一方、ヤン・グムヒは韓国を代表する詩人の一人である。韓国世界文学協会の第2代会長を務め、済州島を拠点に、韓国文学と平和文化の地平を広げるうえで中心的な役割を果たしてきた。

マキ・スターフィールドとヤン・グムヒの二人が、それぞれ国際的な文学の舞台に確固たる、そして輝かしい地位を築いているからこそ、本詩集の価値はいっそう鮮やかに輝くのである。

マキ・スターフィールドの詩には、タイの異国的な風景と宇宙的なイメージを結びつける、際立った才能が示されている。「大河」を意味する名を持つチャオプラヤー川について、彼女は次のように詠う。

神に代わるもののように、
おまえは心の狂気へ触れ、
囚われたこの身体へ
入り込んでくる。

この深遠なイメージは、宇宙の広がりとは響き合っている。

同様に、澄み切った海と白い砂浜で知られるタイの美しいサメット島について、彼女はこう詠う。

サメット島は色彩を集める、
まるで自らの魂を
集めるかのように。
風と水に磨かれた
ひとつの石。

ここでは永遠という感覚が
ゆっくりと、静かに、

空気の中へ溶け込んでゆく。

その感覚的な思索の広がり、まるで宇宙そのものの中で揺蕩っているかのようである。

外国語としてのタイ語への関心を表した「言葉の囁き（スコールとの共鳴）」、また「ここにもまた（スントーン・プーに捧ぐ）」におけるタイへの詩的な想起——「タイの夕暮れ、甘やかな歓びの記憶」——そして「バンコク朝の詩編」における、

静かな熱風が肌を撫でる。

夜明けの光が葉に触れる。

バンコクは

ゆっくりと

目を覚まし始める。

という詩句は、存在への洞察が澄み、そして温かな詩人の姿を明らかにしている。

こうした詩人の姿は、「名前のない祈り」にも見て取ることができる。

夜明けの托鉢の時間、

(……)

差し出した掌の上で、

白い米が震えている。

そのぬくもりは、

誰か遠い人の祈りの残り火のように、

胸の奥をかすかに撫でた。

マキ・スターフィールドは、その詩を通して、ジャン＝ポール・サルトルが『美学』において述べた、詩とは「言語の美を追求する芸術」であるということを体現している。

一方、ヤン・グムヒの詩には、深い思索を通して生命の本質を見つめる、優れた力が表れている。「世界を照らす光」では、次のように詠う。

それは、自由が限りなく広がる場所で輝き、

正しさと誤りが入り混じる世界にも光を当てる。

その源は分からなくとも、

真実の中で、その光は強くなっていく。

そして時を超えて、勇敢に、自由に、

その光は永遠に輝き続ける。

この詩句には、聖書の「真理はあなたがたを自由にする」という言葉を思わせる、精神的な信仰が込められている。

また、「私の中にある力」では、次のように歌う。

たとえ風が

心に植えた夢を引き裂こうとしても、

そこに虹がかかる——大きな橋となって、

その内側で希望と翼が強く育っていく。

だから私の夢は、まっすぐに高く輝きながら、

消えることのない青春の光に包まれている。

その声には、夢と希望に満ちあふれた内なる力が宿っている。とりわけ最後の一行、

「前へ進もう——恐れるものは何もないよ！」という言葉は深い響きを生み出し、預言的な信仰の精神にまで通じているように感じられる。

とりわけ「風と水は争わない」において、ヤン・グムヒは、自らの人生経験を通して、存在と人間の本質について深く考察している。東洋思想が深く息づくこの詩は、現代を生きる私たちに強く語りか

ける、新たな生命力の体験をもたらしてくれる。

この点において、レオン＝ポール・ファルグの言葉が思い起こされる。彼はかつて、こう記した。「完璧な一文は、最も偉大な人生経験の頂点にある。」

ここまで見てきたように、日本のマキ・スターフィールドと韓国のヤン・グムヒ、それぞれの詩的意識と詩世界は、個々の詩的体験、すなわち創造の体験を通して表現されている。

しかし、二人には一つの深い共通点がある。

それは、世界の平和と人類への愛を切望する詩の精神を、二人の詩人がともに体現していることである。

まさに今この瞬間にも、私たちの惑星では戦争の渦が悲劇的に巻き起こっている。そのことを思うとき、マキ・スターフィールドの「ここは戦争のない国」は、次のような世界への切実な願いを表している。

ここは戦争のない国

ライバルはもういない

威張る支配者もいない

すべては平和だ

すべてテレパシーで人々はコミュニケーションをする
ヤン・グムヒもまた、「平和への道」において、平和への願いを
次のように表している。

闇が最も深まる夜ほど、
光はより鮮やかに輝く。
その光のように、平和がやさしく力強く、
ガザの絶望にひび割れた大地へと染み渡りますように。
重く垂れこめる空気の中で、
希望の灯となりますように。

そして「平和への祈り」では、切なる祈りを捧げている。

戦いへの欲望が遠ざかり、
争いを鎮める穏やかな水へと流れ込み、
平和のぬくもりが広がって、
すべての大地に触れ、
傷ついた世界を癒やしますように。
私たちは祈ります。
太陽の光のような癒しの恵みが、
平和の香りを世界へと届け、

すべての憎しみをほどこしながら、
私たちをひとつに結び、
まるでひとつの命のように、
共に呼吸できますように。

マキ・スターフィールドとヤン・グムヒが、共通する詩の精神のもとに生み出したこの詩集は、韓国と日本、両国の文学界にとって、美しい贈り物となるに違いないと、私は固く信じている。

この素晴らしい共同詩集の刊行を、両詩人に心よりお祝い申し上げます。

許炯萬（ホ・ヒョンマン） 略歴

詩人・許炯萬（ホ・ヒョンマン）は、1945年、韓国全羅南道順天市に生まれる。1973年、文芸誌『月刊文学』に「冥婚」を発表して文壇デビュー。20冊の詩集を刊行し、韓国詩壇において「叙情の嫡子」と称される重鎮である。作品は海外でも紹介され、中国語詩集『許炯万詩賞析』のほか、日本語版詩選集『耳を葬る ホ・ヒョン

マン詩選集』（吉川凧訳、クオン）などが刊行されている。

韓国詩人協会賞、永郎詩文学賞、片雲文学賞、空超文学賞など、数多くの文学賞を受賞。韓国世界文学協会第9代会長を務め、現在は国立木浦大学校名誉教授。